



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「ファーストクラスの心配り」、「あなたの人格以上は売れない!」(プレジデント社)、「成「幸」学」(講談社)、「出過ぎる杭は打ちにくい!」(サンマーク出版)、「面白くなくちゃ人生じゃない!」(ロングセラーズ)、「小説・球磨川」(上下巻・ワニブックス)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 227

究極の自己管理と成功法

「君の家には手作りのプールがあると言うが、私の家には屋内に温水プールがあるんだ。だから冬でも毎日泳げる。もう91才になったから、ちょっと苦しいが、息が続く限界まで深く潜る。そうすると、もう駄目だ!と言うぎりぎりになる頃にパッとヒラメキがある。直ぐに、それを自分で発明した水中でも書けるノートとペンでメモする。私がエジソンを越す数の発明をしてきた大きな原点だ。愚か者は楽な道を、天才は困難な道を選ぶ……『撰難楽』が私の座右の銘だからね」

1 942年の中学生時代に、母親が醤油の一升瓶から醤油差しに移すのに苦労しているのを見て手動ポンプを考案し、それが現在の灯油ポンプになったなど、日本の発明王・ドクター中松義郎。彼は食事しながら私に発想方法を教えてくれた。1928(昭和3年)生まれ。東大工学部卒業後、就職した三井物産でヘリコプター農業散布を、そしてパソコンの記録媒体であるフロッピーディスクを発明するなど頭角を現す。東京都知事や参議院、衆議院選挙に16回も出馬して総て落選するなど破天荒なタレント発明家として有名になるが、そばにいと常に笑顔のジェントルマンで、写真を一緒に撮ると必ずピースサインをするように言われる。これはピースの二本指ではなくて、“なかまツー”なんだよ、と。

仕事のできる人間とは、毎朝、あるいは毎年の自分に、ヘッドライン作りができるかどうかだ。いわば、目標設定だが、やり方は簡単だ。

- ①先ず今日一日の仕事が終わったら、明日しなければならない仕事を、どんなことでも「6つ書き出してみる」
- ②重要度に従って、1～6番までの「順位をつける」
- ③寝る前に一度「声に出して読む」
- ④朝起きたら真先に「目を通す」
- ⑤仕事を始める前に「もう一度目を通す」

後は「順位に従って」一つひとつ片付けていく。後区切りの「休みは15分以内」とする。たったこれだけのことである。頭に浮かぶ気になるこ

とをすべて書き出して把握し、それを一つずつ片付けて実践していく。大切なことは、この方法を毎日続けるということ。もし、全部できなかったとしても残りは忘れてしまっても大丈夫。なぜなら、最も大事なものは既に手がけているからね。絶対に省略していけないものは、“声に出して読む”である。五感の中で最も重要な自動操縦部分である潜在意識にインプットするためには、読む⇒聴覚を通してオートパイロットである潜在意識・サブリミナルに刷り込む、これがミソなのだ。人間には、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の5感があり、子宮に入っている間は母親の心臓の鼓動と波動で脳も成長するが、それは聴覚でのみとらえる。だから大人になっても耳から入った情報はフィルター無しで、すんなりと自動操縦意識に入りやすい。声に出して耳から入れる。そうすれば無意識のうちに行動に移っているはずだ。

2 019年正月の箱根駅伝で、東海大学が初めの優勝を果たした。マスコミから私に連絡があり、「どういうことを学生たちに教えたのですか?」との質問。実は私はこの大学などで定期的に13年間も教壇に立っているが、駅伝の選手も受講生として私の話を1年生からずっと聞いてきていた。“心想事成、人は思ったままの人間になるし、思ったとおりの人間にしかれない!”を擦り込んできた。毎日の練習が終わって疲れ果てていても、帰る前に必ず全員で、“優勝した瞬間をイメージして雄たけびを上げる!習慣”を身につけさせた。そして、各人が優勝のインタビューを受けて答える練習と、それに監督の胴上げをエアプレイする! このファイナル・デスティネーション、究極の終着点が映像的にもクリアになって焼き付いていれば、潜在意識は次第にそれが当たり前のポジションだと錯覚して、何の抵抗も無くそこに導くのだ。国際線乗務で数多くのオリンピック金メダリストと話したが、彼等の共通点は、勝つことよりも、優勝の表彰台でどのようなガッツポーズを取るかを明確にイメージしていたかであった。